

義認・聖化・栄化

はじめに

2018年6月から、みやま集会では、救いの3つの段階である「義認・聖化・栄化」を学んでいます。

救いとは、一言で言えば、人が神によって造られた本来の目的のとおり完成されることです。その完成のことを、「栄化」と言います。

救いの入り口は「義認」、その入り口から入って完成に向かう途上は「聖化」、そして完成が「栄化」というわけです。

人が救いを受けるかどうかは、その救いの入り口に入るかどうかで決まります。聖書では、救いの入り口に入ることを、「神から義人であると認められる」と表現します。これを短く言ったのが、「義認」です。

では、人はどのようにしてその入り口に入るのでしょうか。また入ったらどうなるのでしょうか。聖書では9つのことを教えています。その9つのこととは、「再生、転回、信仰、悔い改め、告白、赦し、転嫁、子とされること、救われたことの確信」です。

こういうわけで、もし、あなたが伝道をしていて、救いとは何ですかと尋ねられたら、栄化のことを説明します。

次に、どのようにして救いを受けるのですかと尋ねられたら、義認と9つのことを語ります。

そして、救いを受けた信者はどのような生活をしたらよいのですかと尋ねられたら、聖化のことを答えるとよいのです。聖化は、信者にとっては、その人の信仰生活そのものです。聖化は、信者になった日からこの地上の生涯を終える日、つまり、肉体の死を迎える日まで続きます。

信仰生活においては、神のことばを学び、それを祈りつつ実行していくことがとても大切です。聖書のことばの中で、どの部分が新約時代の信者にとって指針となるのか、そのことも学んでおくことが有益です。

そこで、みやま集会での学びの内容と順序を次のようにしています。全部で5章です。

目 次

その内容の概要

第1章 栄化

- 救いとは何か。人が神によって造られた本来の目的のとおり完成されることです。

第2章 救いの9つの面

- 人はどのようにして救いを受けるのか（再生、転回、信仰、悔い改め、告白）
- 救いを受けたら、どうなるのか
（赦し、転嫁、子とされること、救われたことの確信）

第3章 義認

- 救いの入り口に入ること＝神から義人であると認めていただく
- その人の現実はそうではない。義人であるとみなされる。

第4章 聖化

- 信者は「義人と認められた」けれども、その人の内側には「罪の性質＝肉」は残ったままである。罪の性質は、人の内側（霊・たましい・心・思考・意志・良心の6つの要素から成る）に影響を及ぼしている。
- 信者には、信じたときに「新しい性質＝霊」が与えられる。新しい性質を受けることで、人の内側の6つの要素は新しくされ、神を愛し、神のみこころに従うことができるようになる。
- 罪の性質が新しくされることはない。罪の性質は新しくされる対象ではない。これは、人が神によって造られたときから元々あった6つの要素ではないからである。よって、信者の中では、罪の性質と新しい性質とが衝突する。
- 信者は、新しい性質に従って歩むことを選択していく中で、その内側の6つの要素が神の子にふさわしく実際に変えられていく。このプロセスを聖化という。
- 聖化は、罪の性質を改善したり、消滅させることではない。信者が罪の性質から完全に解放されるのは、信者が肉体的に死ぬとき、または変換によって栄光の体を受けて地上から携挙されるときである。

第5章 新約時代の信仰生活における指針とは

第2章 救いの9つの面

第四 悔い改め

悔い改めについて、次のアウトラインで学びます。

1. 「悔い改め」の意味
2. 「悔い改め」に関する原語（ヘブル語とギリシア語）について
3. 「悔い改め」の特徴 7つ

1. 「悔い改め」の意味

- (1) 日本語で「悔い改める」とは、「今までの行いが間違っていたことを悔いて、これからは行いを改める」という意味である。
- (2) しかし、「悔い改める」と訳されている聖書箇所文脈から読み取ると、その意味は次のようになる。
 - ① 人の考えや意識の中で何か変化が起きる。
 - ② その変化によって、その人は、自分の行動や生き方において、間違っていた方を向いていたところから向きを変える。
- (3) したがって、間違っていた方を向いていたことを「悔いる」、あるいは「悲しく思う」といった感情は、「悔い改め」そのものではない。悔い改めた結果、すなわち考え方が変わった結果、自分のしてきたことを悔いるのである。しかし、その悲しみは絶望的な悲嘆ではなく、そこから救い出されたことへの感謝と喜び、そして再出発の希望へとつながる。
- (4) 聖書における「悔い改める」の、基本的な意味は、「思考を変える」である。自分が霊的にはどこにいるのか、そのことについて考えを変えることである。人がなぜ、どうしようもない虚しさや不安や孤独感に押しつぶされそうになるのか、その原因と対処についての考えを変えることである。

2. 「悔い改め」に関する原語（ヘブル語とギリシア語）について

- (1) ☐ ナウカム・・・語源は「深く息をする、ため息をつく」→思い直す、悲しく思う、残念に思う
 - ① 創6:6～7 「悔いる」「残念に思う」
 - ② 出32:12、14 「思い直す」
 - ③ 士師2:18 「あわれむ」
- (2) ☐ シュブ・・・「向きを変える」、「向きを元に戻す」 旧約聖書での主要な用語
- (3) ☐ メタノイア・・・メタは「後で」、ノイアは「知る」→文字通り、後から知る、→ 後から得た知識によって考えを変えることを意味する。☐ ナウカムに対応する用語。新約聖書では、信仰をもって考えを変えることに使われる。

- ① ルカ 24 : 47
- ② 使徒 2 : 38、3 : 19、5 : 31、11 : 18、26 : 20
- ③ ロマ 2 : 4、Ⅱコリ 7 : 9、10、Ⅱテモ 2 : 25
- ④ ヘブ 6 : 1 「死んだ行いからの回心」
- ⑤ Ⅱペテ 3 : 9
- (4) **ギ**エピステレフォウ・・・「向きを変える」、「向きを元に戻す」 **ヘ**シュブに対応する用語。新約聖書では「立ち返る」、信仰をもって考えを変えることに使われる。
 - ① 使徒 15 : 3 「異邦人の改宗**ギ**エピストロフェ（名詞形）」、26 : 20 「立ち返り」
 - ② Ⅰテサ 1 : 9
- (5) **ギ**メタメロマイ・・・「あることについて、後から心配になる」これは、悔やむという感情に重点がある。新約聖書では、信仰と関係ない後悔について使われる。

よって、救いと関係する「悔い改め」ではない。

 - ① マタ 21 : 30 「悪かったと思って」、32 「悔いる」、27 : 3 「後悔し」
 - ② Ⅱコリ 7 : 8 「悔いる」
 - ③ ヘブ 7 : 21 「みこころを変える」

3. 「悔い改め」の特徴 7つ

- (1) 悔い改めは、救いにおける【再生と転回】の最後の段階であり、最終的な人の側での意識的行動である。
 - ① 「再生」は、瞬間的な神のわざであり、人の側には「生まれた」という意識はない。再生の手段は4つ、「神の意志、聖霊、神のことば、そして、信仰」である。再生は、人の側での「信仰」と同時に起きる。
 - ② 再生に続いて起きる「転回」では、これもまた神のわざであるが、人の側には「向きを変えた」という意識がある。
 - ③ 向きを変えるときは順序は、A【知識→同意→信頼】、そしてB【実際に向きを変える】である。Aは「信仰」、Bは「悔い改め」
 - 知識：何から何へと向きを変えるべきかを知る
 - 同意：メシアについての事実について、それを真実であると同意する
 - 信頼：神に信頼する、信じる
 - ④ B【実際に向きを変える】＝悔い改め、これは、救いにおける【再生と転回】の最後の段階であり、最終的な人の側での意識的行動である。
- (2) 悔い改め＝実際に向きを変えると、その人の人生は、これまでとは全く違った方向へと動いていく。その人と神との関係、他人との関係、世や富との関係
- (3) 悔い改めを、聖書では、「信仰」と同じものとして扱うことがある。
 - ① 悔い改めは、人が自分の考えを変えることである。その変化は、【神のことばによって明らかにされた真理を知って、それに同意し、それに信頼すること】、

すなわち、「信仰」によって生じる。よって、悔い改めと信仰は切り離せない関係にあり、悔い改めが信仰と同じ意味で用いられることがある。

- ルカ 24 : 46～48 「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを受けさせる悔い改め・・・」
 - 使 11 : 17～21 「イエス・キリストを信じた・・・神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになった・・・主イエスのことを宣べ伝えた。・・・大ぜいの人が信じて主に立ち返った」
 - 使 26 : 20 「悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来た」 → 「ふさわしい行い」は、悔い改めそのものではなく、悔い改めた結果、後から現れてくるものである。
 - ロマ 2 : 4 「神の慈愛があなたを悔い改めに導く」
 - 3 : 22～28 信仰による義認
 - 8 : 28～33 神の選びと義認
 - 9 : 16 「事は人間の願いや努力によらず、神のあわれみによる」
 - II ペテ 3 : 9 「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」
- ② 福音は、悔い改めの福音である（マルコ 1 : 15、ルカ 24 : 47、使 26 : 20）。この悔い改めとは、考えを変えてメシアを信じること、信仰を意味する。
- ③ バプテスマのヨハネが宣べ伝えたのは、「悔い改めのバプテスマ」（マルコ 1 : 4、使 13 : 24）。彼は、イスラエルの人々に、どうしたら神の国に入ることができるのか、それはパリサイ派が教えるようなことではない、考え方を変えなさい、と教えたのである。そして、メシアを指し示した（マタ 3 : 11～12、3 : 14、ヨハ 1 : 29～37）。彼のメッセージは、メシアを信じなさいということであり、この点でも、悔い改めは信仰と同じ意味のことばとして用いられている。
- ④ 特にイスラエルの人々は、自分たちの考えを変えてイエスをメシアとして認めなければならない。その意味で「悔い改めなさい」と聖書は命じている（使 2 : 38、3 : 19）。これは、イエスをメシアとして信じなさい、ということと同じである。
- 「それぞれの罪」（2 : 38）、「あなたがたの罪」（3 : 19）とは、イエスをメシアではないと拒否した当時の世代のイスラエルが犯した民族的・歴史的な罪である。
 - その罪の結果、紀元 70 年、ローマ軍によってエルサレムとその神殿が破壊され、110 万人のユダヤ人の死につながった。

(4) 悔い改めはどこから来るか、神の側からと人の側からの両方から見ると・・・

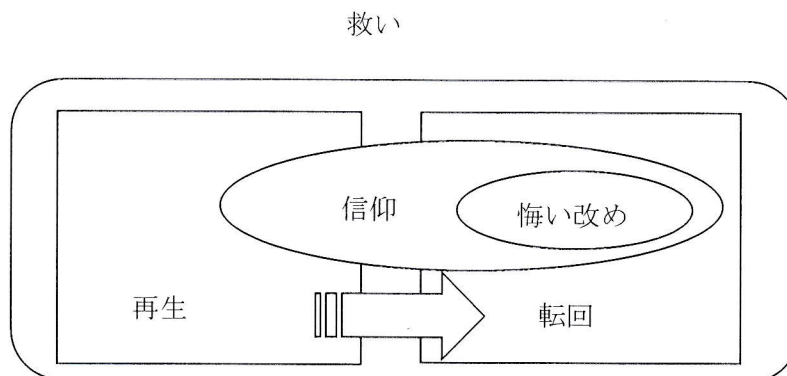
① 神の側からは、悔い改めは、神から人への賜物である（使 5：31「神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与える・・・」、11：18、Ⅱテモ 2：25）

② 人の側からは、4つある。

- **神のことば**によって、なぜ悔い改めが必要か、どのように悔い改めるのか、を理解する（ルカ 16：30～31「モーセと預言者の教えに耳を傾ける」）
- **誰かが遣わされて**、福音が宣べ伝えられる。その中では、イエスについて考えを変えるように、そして福音を信じるように、語られる（マタ 12：41、ルカ 24：47、使 2：37～38、26：16～18、Ⅱテモ 2：24～25）
- **神は良い方である**、神は私に良いことをしてくださるお方である、このことが人の心の中に響いたとき、人は悔い改めに導かれる（ロマ 2：4、Ⅱペテ 3：9）
- **懲らしめ**、黙 3：19 神は時には、愛する者（原文は「わたしが愛する者」＝神が救いに選んでおられる人）を悔い改めに導くために、懲らしめの段階を通過させることがある
 - 黙 3：14 ラオデキヤ（人が支配するという意味）の教会は、神ではなく人が支配する背教の教会を指す。黙示録の七つの教会は、教会時代＝教会誕生（使徒 2 章）から教会携挙（Ⅱテサ 4 章）までの七つの時代を預言し、ラオデキヤの時代は、その中の最後の七番目の時代である。現代がこれに当たる。
 - 「熱い」というのは、真の信者である。
 - 「冷たい」というのは、自分は信じません、という人々である。
 - 現代の教会の特色は、そこに集う人々のほとんどが、「冷たくもなく、熱くもない」＝信者のふりをしているだけ、あるいは信者のつもりでも神のことばをまだ本当には信じていない人である。
 - 黙 3：19 この中にも、「わたしが愛する者」、すなわち、神が救いに選んでおられる人が存在する。神は、その愛する者を、「しかったり、懲らしめたりする」。その目的は、「熱心になって、悔い改める」こと、すなわち、その人が真の信者となることである。
 - よく似た表現の箇所として、ヘブ 12：10 がある。こちらは、すでに神の子たちとなっている信者に対する訓練、懲らしめである。その目的は、救いを与えることではなく、「私たちをご自分の聖さにあずからせるため」＝聖化、である。これは、第 4 章で詳しく扱う。

(5) 悔い改めは、救いとは切り離せない

- ① (3) ①で見たように、悔い改めは信仰と切り離すことはできない。信仰そのものが、考えを変えることを含んでいる。そのため、「悔い改め」が、信仰と同じ意味の用語として用いられることも見た。
- ② ここでは、悔い改めと救いとは切り離せないことを見よう。
- **再生**は、人の信仰と同時に起きる。
 - 再生の次に続く**転回**では、人の側で、神への信仰と今までの生き方についての悔い改め、すなわち生き方についての考えが変わる。
 - この再生と転回という出来事全体が、「救われた」ということである。
 - 救われたあとで、その人の行動が変わっていく。それは、救われたことの現れである。→ 再生も転回もないのに、行動だけ変えようとしても、それは救いとは何の関係もない。悔い改めとは、行動を変えることではなく、どう行動するかという考え方を変えることである。思考が変わると、人生が変わる。
- ③ よって、救いにかかわる【再生、転回、信仰、悔い改め】、これら4つの関係を図示すると次のようになる。



(6) 救いを受けるときの悔い改めと、救われた信者がする悔い改め

- ① まだ信者でない人が悔い改めると、救いに至る。
- ② すでに救われた信者が悔い改めると、交わりの回復になる (Ⅱコリ 7:6~13)

(7) 悔い改めと人の内側の要素との関係

- ① 思考・・・自分のこれまでの生き方は、神の目から見ると罪であると知る (ロマ 1:32、Ⅱテモ 2:25)。考えを変えること、これが悔い改めである。
- ② 心・・・罪についての悲しみを覚える。悲しみ自体は悔い改めではないが、考えを変えると、これまでの罪について悲しみを覚える (Ⅱコリ 7:9~10)
- ③ 意志・・・これまでの生き方を変え、神のことばに従った目標を目指す (例: Iテサ 1:10)